

第 55 回 京都教区 信徒の集い
自由参加プログラム

DVD 上映とお話

「人々に英語の聖書を！」

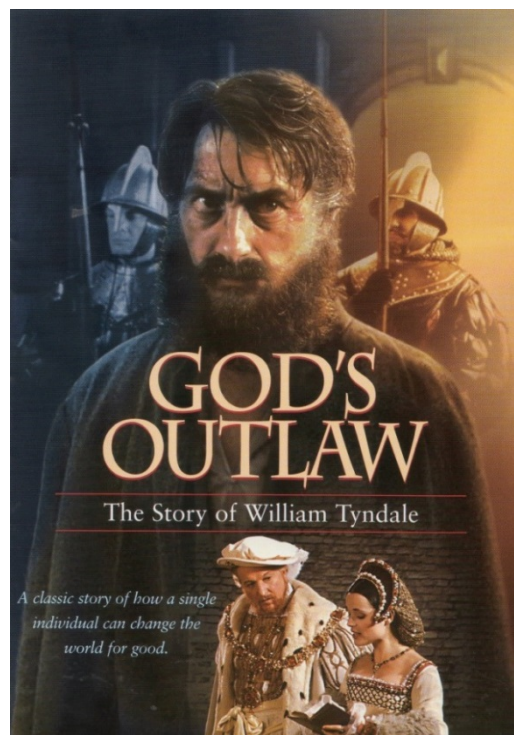
～ 殉教者ウィリアム・ティンダル」

聖公会が生まれようとする 16 世紀の前半、人々にギリシア語・ヘブライ語原典から聖書の言葉を届けようとして命をささげた司祭の物語です。

時：2014 年 9 月 14 日（日）20：30～21：30

場所： ホテル日航奈良 天空の間（5 階）

解説： 井田 泉司祭（奈良基督教会）



登場人物

ウィリアム・ティンダル (Roger Rees 主演) 1536年10月6日殉教

英国オックスフォード大学とケンブリッジ大学に学び、ヘブライ語・ギリシャ語
ラテン語・イタリア語・フランス語・スペイン語・英語の7か国語が堪能 司祭

ジョン・ウォルシュ卿夫妻

ティンダルを二人の息子の家庭教師として雇う ジョンはヘンリー8世の友人の一人

ジョン・フリス

ケンブリッジ時代からのティンダルの旧友 ギリシャ語・ラテン語に通じ、
ティンダルの旧約聖書(モーセ五書・ヨナ書)翻訳を手伝う 後に英国で殉教

ハンフリー・モンマス

ロンドンの裕福な商人 ティンダルの支持者 半年間ティンダルを邸宅に住まわせる
ロンドン教区主教カスパート・タンストール

穏健派として知られていたが、ギリシャ語から英語の翻訳に関し、ティンダルを拒絶

ウィリアム・ロイ

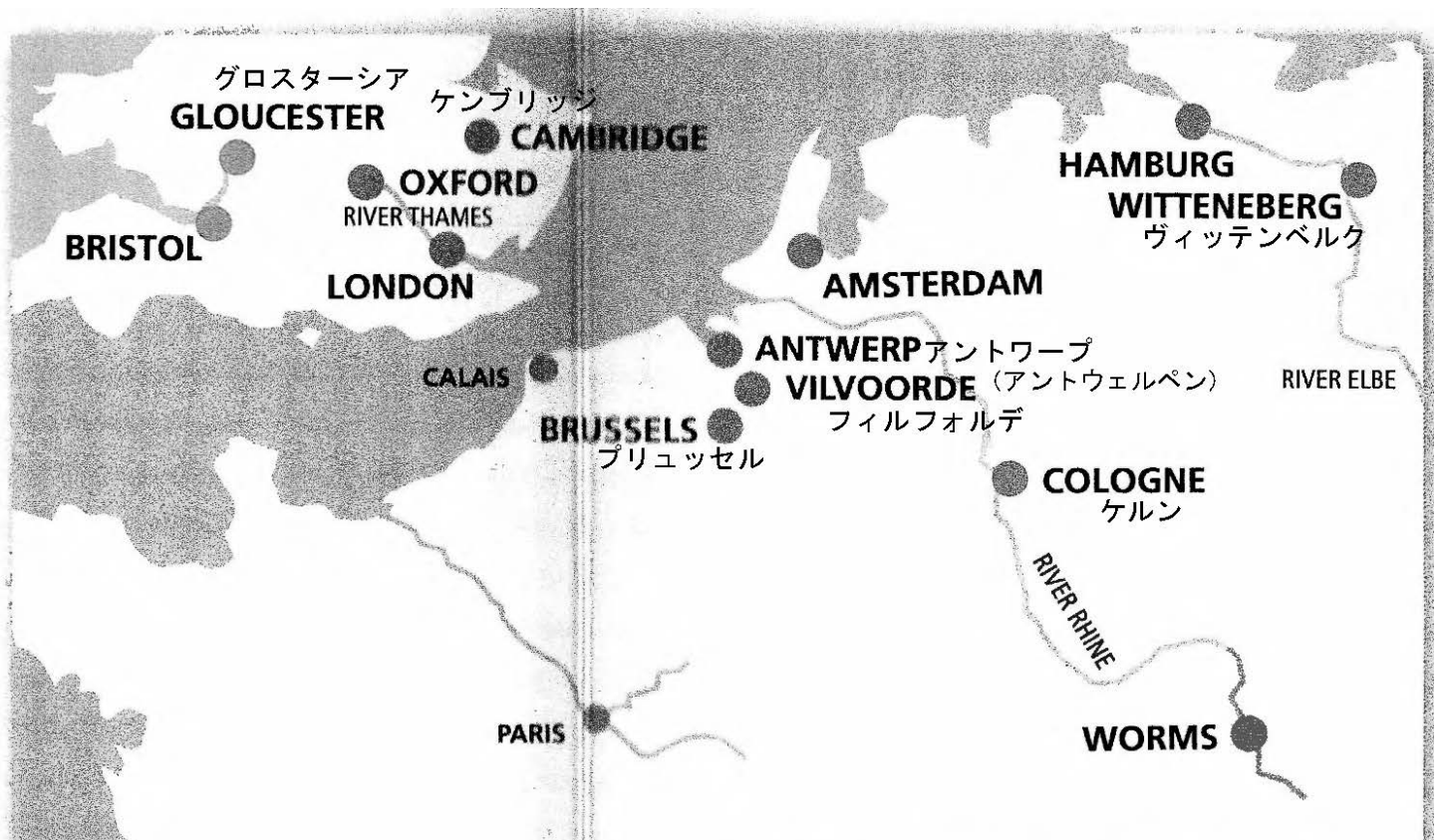
ティンダルの協力者として、ケルンで、密かに新約聖書の印刷を行う

ピーター・クヴェンテル

ドイツのケルンにある印刷所の経営者 ティンダルの英語聖書を印刷

トマス・ポインツ

ウォルシュ卿夫人のアンと従兄弟 改革派としてティンダルをかくまう



GOD'S OUTLAW: The Story of William Tyndale

ウィリアム・ティンダルの物語

① 子どもが英語で主の祈りを唱えた罪を問われ、数人が火刑（コベントリー、1519年）。

3年後、ティンダルはグロスターシアのウォルシュ家の家庭教師となる。友人ジョン・フリスが訪ねてくる。野道を歩きながら……

「農夫や鍛冶屋……。どこで人はキリストと出会えるのか。司祭や修道士たちは理解できない言葉で聖人たちに祈っている。かつて主の神殿で詩編が歌われたのはイスラエルの言葉によってだった。なぜイギリスではラテン語なのか。私はイギリス人が聖書を英語で読めるようにしたい。」

教会（？）の中庭の壇上で演説

「主なる神は預言者エレミヤをとおしてこう言われた。『恐ろしいことがこの地に起こっている。預言者は偽りを語り、祭司は自分勝手に掟を定めている』。ここイギリスではどうか。欲深い司祭たちももったいぶった高位聖職者。キリストの福音はなく、あるのは金もうけの商売だ。』

「見よ、その日が来る、と主は言われる。わたしは飢饉をもたらす。パンではなく、み言葉を聞くことの飢饉を。」

② アーチディーコン（大執事）による尋問。「あなたは人々にむき出して聖書を広げた」

「彼らがキリストに出会えるように、私は神の言葉を解き明かしたのです。」

「あなたは法に従わなければならない。異端の言葉を語ることは許されない。」

③ ④ 聖書の英語翻訳のゆえに迫害の危険にさらされたティンダルは、老司祭の助言を受け、ロンドン主教タンストールを訪ね、協力を願う。主教はティンダルの賜物を認め、価値ある仕事だと言うものの、しかし急がず時期を見るように言う。

「人々は今、真理の言葉に飢えています。」

「ウィクリフ（異端として処刑された）の例がある。信徒が聖書を手にすることで教会に不名誉をもたらすことを考えたか？ 無秩序、不服従が生じることがあった」

「主ご自身が『わたしは平和ではなく、剣をもたらすために来た』と言われました」

⑤ 失意のティンダルをフリスが励ます。

「神が命じられるのは、われわれがキリストの福音を宣べ伝えることだ。」

ティンダルがギリシア語「エクレシア」（教会）を“church”ではなく“congregation”（会衆）と訳したことが話題になる。「エクレシア」は「呼び出された者」の意味であり、キリストを信じるすべての会衆を指す。こう話しているうちにティンダルは元気を取り戻す。しかしロンドンには無許可で英訳聖書を印刷してくれるところはなく、ドイツへ行くことになる。

6 ケルンのクヴェンテルの印刷所でティンダルの英訳聖書が印刷されている。クヴェンテルは「異端の書」を印刷していることに不安を抱えている。聖書はずだ袋の中に隠してあるという。ティンダルは紐に吊り下げられている紙を見て「これはもう終わったのか？」
「できた。しかしまだ乾いていない」「よく読める」
クヴェンテルは印刷できたての聖書を読み始める。コリントの信徒への手紙 I 第 13 章。

7 議員ともうひとりが話をしている。
「フランクフルトでは異端が猛威を振るっていて、そこから私は逃れてきた」
「ふたりのイギリス人がここに来ている。(紙を示して) これが彼らのやっていることだ」
「立派な職人わざだ。これは何か」
「これはパウロのコリント書簡だ。クヴェンテルのところでサンプルを見つけた」
「クヴェンテルのところに雇われているひとりが言うには、やがてイギリス人は皆、自分の言葉の聖書を持つことになるだろう。それはケルンから来る、と」
クヴェンテルの印刷所は搜索され、彼は尋問を受ける。脅迫されてティンダルの名前を明かす。ティンダルはすでに逃亡した後だった。

8 ティンダルは捕らえられ、「異端」のかどで裁判に引き出される。
罪状の第 1 「信仰のみによって義とされると主張」
第 2 「救いは、罪の赦しを信じ、福音のうちに示された神の憐れみを受けるだけで十分と主張」
ティンダルはベルギーのフィルフォルデ城に監禁される。ベルゲンの侯爵への手紙。
「ヘブライ語の聖書と、ヘブライ語の文法と、ヘブライ語の辞書を許可していただけるようにおっしゃってください。」
ティンダルは司祭職を剥奪され、火刑に処される。ティンダルの最後の言葉。

Lord, open the king of England's eyes!

(主よ、イングランドの王の目を開いてください！)

最後のナレーション

「ティンダルがなくなったとき、すでにイングランドには二種類の聖書が広がりつつあった。両者ともに、ティンダルによる新約聖書翻訳を効果的に取り入れていた。またその旧約聖書にもティンダルの多くの訳業が用いられていた。それらの一つ、カヴァデール聖書がヘンリー8世にささげられたとき、主教たちは、その聖書の中には誤りは見出せないと保証した。王は言った。「その中に異端がないのであれば、神の名によって、それが人々の中に広まるようにせよ」。

翌年、王は非常に意味のある小さな一節を公認して、それが英語聖書のタイトルページに付加されるように許可した。『王の最も慈悲深い許可による』

1538年9月5日、ヘンリーはイングランドのあらゆる教会に命じて、英語の最も大きな聖書1巻を置くようにさせた。英語で印刷された聖書は、イングランドの宗教改革の心臓であった。それは今も、ウィリアム・ティンダルへの記念であり、また彼の死に際しての祈りへの答である。」

(解説・井田 泉)

1 Corinthians 13:1 Though I speake with the tonges of men and angels and yet had no love I were even as soundinge brasse: or as a tynklynge Cymball.

² And though I coulde prophesy and vnderstode all secretes and all knowledge: yee yf I had all fayth so that I coulde move mountayns oute of ther places and yet had no love I were nothyng.

³ And though I bestowed all my gooddes to fede the poore and though I gave my body even that I burned and yet had no love it profeteth me nothyng.

⁴ Love suffreth longe and is corteous. Love envieth not. Love doth not frowardly swelleth not

⁵ dealeth not dishonestly seketh not her awne is not provoked to anger thynketh not evyll

⁶ reioyseth not in iniquite: but reioyseth in the trueth

⁷ suffreth all thyng beleveth all thynges hopeth all thynges endureth in all thynges.

⁸ Though that prophesyng fayle other tonges shall cease or knowledge vanysse away yet love falleth never away.

⁹ For oure knowledge is vnperfect and oure prophesyng is vnperfect.

¹⁰ But when that which is perfect is come then that which is vnperfect shall be done away.

¹¹ When I was a chylde I spake as a chylde I vnderstode as a childe I ymaged as a chylde. But assone as I was a man I put away childesshnes.

¹² Now we se in a glasse even in a darke speakynge: but then shall we se face to face. Now I knowe vnperfectly: but then shall I knowe even as I am knowen.

¹³ Now abideth fayth hope and love even these thre: but the chefe of these is love. (1Co 13:1-13 TNT)

13:1 たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。

13:2 たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。

13:3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

13:4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。

13:5 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。

13:6 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。

13:7 すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

13:8 愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、

13:9 わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。

13:10 完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。

13:11 幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。

13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。

13:13 それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

ウィリアム・ティンダル略年表

	ティンダル	世界	日本
1494?	誕生		
1506	オックスフォードへ		
1515	オックスフォード修士		
	司祭叙任		
1519	英語で主の祈り等を子どもたちに教えた罪により数名火刑		
1517	このころケンブリッジ滞在	ルターの宗教改革始まる	
1520		教皇、ルターを異端として断罪	
1521	ウォルシュ家で家庭教師	ウルジー、ルターの本を焼く	
1523	ロンドン滞在		
1524	ドイツへ タンストール主教に会う		
1525	ケルンで新約聖書の印刷開始		
1526	新約聖書の印刷発行（ヴォルムス）	ルター派文書焚書開始 タンストール主教、ティンダルの聖書を批判する説教	
1528	アントウェルペン（アントワープ）滞在 『キリスト者の服従』	モンマス、ロンドン塔に監禁	
1529		ヘンリー8世離婚問題が議会に	
1530		ウルジー失脚	
1534	新約聖書改訂版	英国の教会、カトリックから離脱	
1535/5/21	逮捕 フィルフォルデ城に監禁	ガヴァデール訳聖書	
1536/10/6	フィルフォルデにて火刑		
1537		マッシュー版聖書	
1538		ヘンリー8世、英語聖書を諸教会に置くよう命じる	
1547		エドワード6世即位	1543 鉄砲伝来
1549		第一祈祷書	キリスト教伝来
1552		第二祈祷書	
1553		メアリー1世即位	川中島の戦い
1556		大主教克蘭マー火刑	
1558		エリザベス1世即位	1580 安土セミナリヨ
1611		欽定訳聖書	1582 本能寺の変 1597 26 聖人殉教